

「観察」徒然草

砂上 史子

私は現在、保育についての研究の一環として、保育の現場での観察を継続的に行っています。今回は、私が大学院に入学して以来約二年半にわたる幼稚園での観察を通じて感じたことを素朴に、思いつくままに、徒然なるままにお話ししてみたいと思います。

中間者として

研究のための観察という目的で保育の実践が行われ

ている場に臨むということは、私は保育をするわけではないので、当然私の立場は「実践者」|| 「当事者」ではなく、「研究者」|| 「第三者」ということになります。けれど、観察をしているときには、私はたとえ保育者ではなくても出来る限りその場の当事者でありたいと思って観察しています。なぜなら、そうしないと、保育のなかで起こっていることをちゃんと理解できないように思うからです。保育に限らず実践という

のは、そこにかかわる人すべてが当事者であるものだと思います。ですから、自分を「壁」にするように第三者的視点から保育を見ていたのでは、そうした観察を基にした研究は、たとえ論文としては綺麗にまともだったとしても、どこか当事者の実感の欠けた実践とのつながりが希薄なものになってしまうように思われます。

そうした自分の観察スタイルもあって、幼稚園で観察しているときには、私はお片付けのときに子どもと一緒に遊具を片付けたり、お弁当のときにテーブルを出したりと、ところどころでちょっとしたお手伝いをすることがあります。それは、意識的に「やろうと思っただけ」というよりも、無意識的に「ついつい体が動いてしまう」という感覚に近いように思います。おそらく、自分もまた保育の現場の当事者だという姿勢で観察していると、そこで起きていることに対して第三者的に距離を置くことができなくて、そうなるってしまうのだと思います。

けれど、それでも、私は子ども達にとってはやはり保育者の先生（以下、先生）ではなく、あくまで「先生じゃないけど、誰かのお母さんでもない、いつも何かを書いたりビデオを撮ったりしているお姉さん」という存在です。ですから、観察における私の存在というのは実践者（当事者）と研究者（第三者）の間にいる「中間者」であるように思います。

この「中間者」というあり方は、観察を始めた頃には子ども達に「何してるの?」とか「遊ばないの?」とか聞かれるたびに、実践者でも研究者でもないどっちつかずな存在である自分を思い知らされる感じがして、ちょっと居心地の悪い感じもありました。けれど、観察が続くにつれて、子ども達の方で「このお姉さんはそういうものなんだ」と納得してくれていったように思います。例えば、先日の観察のなかで、私の目の前で男の子同士がかなり激しく叩き合うケンカを始めたときに、私は咄嗟にそのケンカを止めに入りました。私は普段先生がやっているように、まずは男の

子達に「どうしたの？」と双方の言い分を聞き始めました。けれど、表面上は先生っぽく落ち着いた感じを装っていたのですが、男の子達のカーアツと興奮して泣き出している雰囲気は私自身も呑まれて、私は内心「ああ、どうしよう、どうしよう」と焦っていました。すると、その場にいた女の子が「先生、呼んでく」と先生を呼びに廊下へ走っていきました。

そのときに私は、私自身が現場での自分の中途半端なあり方を悩まなくても、子どもの方で私が保育者としては役不足だということをよく分かってくれているのだなあ……(苦笑)ということがよく分かりました。ですから今では、「このお姉さんはそ・う・い・う・も」として子どもに受け入れてもらっているように感じて、自分の「中間者」という観察スタイルも一つの観察のあり方なのではないかと思えるようになりました。

からだの感じに気づくこと

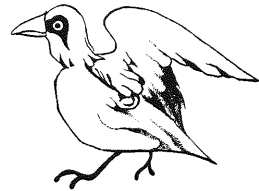
私の研究テーマは「保育における身体性」というも

ので、保育の実践のなかでは保育者と子どもの身体のあり方が非常に重要ではないかという問題意識に基づいて研究を進めています。ですから、

実践の場で観察するということとは、観察者自身、つまり私自身の身体のあり方も含め

て、保育の実践にかかわる身体性に気づく経験でもあります。

観察を始めた頃のビデオ記録のなかに、私が先生や子ども達と話している声が入っている場面があるので、その場面を見ると(聞くと)、すごく上ずった妙に甘い声を出している自分に気づかされます。おそらく、観察当初はまだ先生や子ども達に対して必要以上に気を遣ったり緊張している部分があつて、そうした「よそ行きの声」になっていたのだと思います。けれど、観察が進んでいくにつれて、先生や子ども達と



話す私の声はだんだんと普段の地声に近くなっていき
ました。きつと、観察を重ねるなかで、先生や子ども
達との関係も深まり、私自身が現場に馴染んでいった
ということが、そうした声の変化に現れているのだと
思います。

また、観察のなかで自分の身体のあり方に気づくこ
とは、保育者ではない自分と保育者である先生との身
体のあり方の違いに気づくことでもあります。

ある日、私が観察しているクラスで、先生と子ども
かみinander一緒に「はないちもんめ」をしたことがあ
りました。そのとき、そのクラスにはいつも保育者の
先生がお二人いらつしやるのですが、たまたま一人の
先生が何かの用事でいらつしやらなかったので、「砂
上さん、入ってもらっていい？」と先生に言われて、
私が片方のチームに入ることになりました。そして、
「はないちもんめ」が始まって、それぞれのチームが
お互いに「かあーつてうれしい」「まけーてくやしい」
と大きな声で言いながら相手側へズンズンズンと出て

いくとき、私は相手チームの先生がやっていたように
子ども達の真ん中で率先して大きな声を出して前に出
て行ったのですが、そのときに自分の身体の何とも言
えない硬さのようなものを感じました。

多少の気恥ずかしさもありましたが、そういうふう
に多少演技的に大きな声を出すということが、今の自
分の身体の動きのレパートリーにはないものだという
ことを改めて知ったとも言えます。観察のなかで先生
を見ているときには特に何も感じていなかったのです
が、この体験を通して、いざ自分が先生と同じような
ことをするとすると、いかに自分の身体がギクシヤク
してしまうものなのか、いかに保育者ではない私と保
育者である先生の身体が違うものなのかということ
を、私は文字通り身をもつて知ることができました。

このことは、裏返して言えば、保育のなかで先生が
普段当たり前のように行っている身体の動きこそが保
育のエッセンスであるということを示唆しているのだ
と思います。例えば、ある日、ある先生がある男の子

の空き箱のロボット作りを手伝っているときに、先生は男の子がテープを切って空き箱に貼るまで、ずっと重ねた空き箱を手で押さえていました。その間に他の子どもがその先生にいろいろと聞いてきたりして、その都度先生は何か聞いてきた子の方に顔を向けて応えるのですが、手はずっと空き箱の上に置いたままで空き箱から離すことはありませんでした。おそらく、先生自身は無意識的にしていたことだとは思うのですが、先生の顔は他の子に向いていても、ロボット用の空き箱の上に先生の手がずっと置かれていたことで、ロボット作りをしていた男の子は安心してロボット作りを続けられたのではないのでしょうか。観察のなかで、子どもとかかわる先生のこうした身体の動きを見るたびに、そうしたささやかな身体の動きこそが保育を支える大きな要素なのだと感じます。その意味で、先生というのはまさに「身体として保育者なのだ」と気づかされます。

まなざしの厚み

観察のなかでは、保育の様子を観察するだけでなく、毎回の保育後（観察後）や学期末に先生と子どものことについてお話しする機会を持たせてもらっています。保育を観察しているときにもいろいろなことに気づくことができるのですが、それと同じくらいに先生との話し合いもまた、私にとっては非常に学ぶことの多い時間です。話し合いのときに、私は先生と具体的な子どもの姿や保育のことについてお話しするのですが、そのときにいつも気づかされるのは、先生のことどもを語る語り口が持っている独特の「暖かさ」です。

話し合いのなかでは、子どもの姿に感心したり、子どもの育ちを喜んだりするような話題も多いのですが、実際にはそれ以上に育ちのなかでさまざまな課題を抱えている子どもの姿について話すことの方が多く、ように思います。けれど、そういう話題のときでも、あるいはそういう話題のときにこそ、先生は顔をしか

めるのではなく、ちょっと余裕を持って、ときには困った子どもの姿についてちょっと微笑みながらお話ししてくれることが多いのです。私は観察をしていて、気になる子どもの姿をちょっと目にただけでも、「ああ、この子のこういうところは、どうなるんだろう？」と心配になるのですが、そういう子どもの姿について先生方とお話ししていると、不思議と「でも、もうちょっと時間をかけて見ていけばいいのかな」と自分の子どもを見る目に余裕が持てるようになります。それは、おそらく、日々保育を行っている先生の子どもに対するまなざしのあり方を私自身も多少共有できるようになるからではないかと思えます。

観察のなかで、子どものちよつとした行動を見て私は先生と笑い合うことがよくあります。子どものちよつとした行動や言葉がとても微笑ましくて思わず笑ってしまう場合も多いのですが、一方で、先生が子どもに注意をしているような場面でも私と先生は一緒に笑ってしまうことがよくあります。そういうのは大

抵、いつも所持品の始末の遅い子が案の定リュックやコップを床に散らかしたままブラブラしていたり、気が強くて友達に対して自分の思いを譲らない子がいつも通りガンとして自分の思いを通そうとしていたり、「直してほしいんだけど、でもそこがその子どもその子らしいところなんだよねえ」という出来事に接した場合は、そういう場合、先生はその子どもに対していつものように「コップとタオル忘れてるよ」などと声をかけるのですが、それと同時に「しようがないなあ（笑）」という感じで私の方を見て苦笑いをするのです。そして、私も先生と一緒にその子どもを見て思わず笑ってしまうのです。本当にそういうときには思わず笑わずにはいられないくらい、その子どもが不思議と可愛らしく思えるのです。もちろん、子どもの行動が度が過ぎたときには、先生は毅然として子どもに向き合います。けれど、そういう場面も含めて、子どもへの笑いに端的に表れているように、先生は基本的に子どもに対してどこかゆとりを持ったたま

なごしを向けているように感じます。

何かが「できる／できない」というふうには評価的に子どもを見るならば、育ちの課題を抱えている子どもに対する先生のまなごしは「これができない、あれもできない」というふうにどこか冷たいものになってしまふと思います。けれど、先生のまなごしが単純にそうはならないのは、先生は子どもを見るときに、子どもの姿を評価する以上に、それを味わうような姿勢、つまり鑑賞するような姿勢を持っているからではないかと思えます。それぞれの子どもが抱えている育ちの課題を誰よりも的確に見つめつつも、子どもがその課題を乗り越えることを誰よりも強く願いつつも、それがなかなか乗り越えられないことも含めてその子どもの姿をまるごと受け入れている姿勢がそこにはあるように思います。だからこそ、先生にとっては相変わらずの子どもの姿が「相変わらずなんだけど、どこかいとおしい」と感じられるのではないのでしょうか。そして、「その相変わらずの子どもにかかわっているのは、

他の誰でもない保育者としての私自身だ」という当事者意識と責任感が、先生がそのように子どもの姿をまるごと受け入れる土台になっているのだと思います。

ですから、先生の子どもに対するまなごしは、子どもに対して甘いのではなく、またただ単に暖かいのではなく、「厚み」のあるものだというふうに感じます。その「厚み」は、保育のさまざまな場面を通して子どもを見ているという「多面的に子どもを見ていること」、子どもと出会ってから今日にいたるまでの「子どもとの歴史を積み重ねていること」に裏付けられた「厚み」なのだと思います。その意味で、保育における子どもの姿をよりよく理解するためには、何よりもそうした先生のまなごしの「厚み」に近づくことが必要なのだと思います。

盛り込むことと切り取ること

私の幼稚園での観察は、保育全体について学ぶというだけでなく、「研究のための事例を集める」という

目的も持っています。ですから、観察から得た事例を元にして研究論文を書くということが、観察の後には待っています。私は昨年の一月に幼稚園での観察で得た事例を元にして修士論文をまとめたのですが、その論文を執筆するなかで私が非常に強く感じたのは、「研究というのは、へ切り取る」作業なのだ」ということです。

論文を書き始める前、私は「幼稚園で縦断的に観察させてもらったおかげで保育や子どものことについて多くのことを知ることができた。論文を書くときには、ぜひ普段の子どもや先生の姿も盛り込んで、普段の保育の様子が生き生きと目に浮かぶような論文にしよう」と意気込んでいました。けれど、いざ論文を書き始めてみると、事例の考察のなかに私が観察を通して知っている子どもや先生の姿をたくさん書きたいとは思っていても、なかなかうまくいきませんでした。もちろん、その背後には私の書く力の弱さもあったと思うのですが、やはり研究というのがあるテーマにつ

いて焦点化するものである以上、カメラで撮影するときには被写体にピントを合わせるとそれ以外のものが背景になってしまうように、自分の研究テーマに沿って事例を考察していくことは、観察で自分が知ったことをどれだけ盛り込むかということ以上にどれだけ切り捨てられるかということに重きが置かれてしまうものである、と感じました。特に、私の研究が注目していたのは、「子どもが他者と同じ動きをすること」というとてもささやかな身体の現象だったために、その現象に研究の焦点を絞ることによって、膨大な観察記録の大半が「背景」になってしまい、論文のなかに十分に生かすきれなかつたように思います。

けれど、それでも、個々の事例の考察にあたっては、私は事例の背後にある文脈（遊びの流れやそこでの子ども同士の関係、それ



らに対する先生の捉え方」を出来るだけ詳しく書くように、「盛り込む」ように努めました。ただ、そのときに私は観察で感じたことを論文に盛り込むことの必要性と同時に、保育のなかの子どもの姿を論文に記述する自分にある種の「無責任さ」のようなものも感じました。例えば、事例での子ども同士の関係を説明するために、私はその事例に登場する子どもについても「緊張感があつて、なかなか自分から動き出せないところがあつた」とか「ちよつと他の子とかみ合わないところがあつた」というふうに、事例が見られた時期の子どもの具体的な姿を記述しました。けれど、そうした記述をする度に、私は、「私はこういうふうに書けば事例の説明が終わるけれど、先生は説明しただけでは終わらないんだよなあ……」と思いました。

同じ一つの子どもの姿について、私の研究は「緊張感があつた」と書いたところで終わりますが、先生の実践は、先生がその「緊張感がある」子どもに対してどうかかわるかというところから始まるのではないで

しょうか。そう考えたとき、研究を行う上で、自分の研究が実践に対してどれだけの、またどのようなつながりを持つのかということを感じて聞うことが研究者にとっては必要なことなのではないかと感じました。もちろん、私の立場はいくら子どもや保育者の先生に寄り添った見方をしたとしてもあくまで研究者なので、そういうふうなことを感じるのは研究者としてはナイーブすぎるのかもしれませんが、それでもやはり、「研究者が終わったところから、実践者は始める」ということをある種の「苦さ」として心に留めておくことは、私がこれから実践との強いつながりを持つような研究、「実践者とともに始まる」ような研究をめざす上でとても大切なことだと感じています。

朝

私は観察をするときには、いつも保育が始まる時間、子ども達がちょうど登園してくる時間から観察を

させてもらっています。私はこの朝の時間がとても好きです。玄関から廊下を一直線に走って保育室に飛び込むようにやってくる子もいれば、家でぐずったのを引きずったままちよつと不機嫌そうにやってくる子もいて、子ども達はさまざまな表情で幼稚園にやってきます。そんな子ども達に対して先生はいつも「おはよう」と明るく親しみを込めて声をかけます——本当にただそれだけの、当たり前過ぎるぐらい当たり前の、毎日繰り返されている光景なのですが、私はそうした子ども達と先生の姿を見るたびに、保育の現場に自分があることをとても嬉しく感じると同時に、私自身が元気づけられるように感じます。

「おはよう」と先生が子どもに声をかけるなかで、先生と子どもは「今日」という昨日でも明日でもない、今ここにある新しい一日のスタートを切っています。「昨日」をひきずっていたり、「明日」に縛られたりすることもあるなかで、それでもまた「今日」という日が新しく仕切り直されるということは、子どもが

行きつ戻りつしながらもそれでも着実に育っていくことを期待することに似ているように感じるのは。おそらく、それは、哲学者のボルノウが、未来へと歩んでいく子どものなかにあるものを「朝のような感情」と名付けたことも通じているのだと思います。だから、子ども達が登園して先生に迎えられるときの文字通りの「朝のような感情」に接するたびに、私は、自分が保育という子どもが育つ現場に立ち会っていることを本当に幸せなことだと感じます。

幼稚園での観察を通して私が感じたことを思いのままに書いてみましたが、私が観察のなかで常を感じていることは何よりも、部外者である私を暖かく迎えてくださっている幼稚園の先生方と子ども達への感謝の気持ちです。この場を借りて改めてお礼を述べさせていただきます。本当にいつもありがとうございます。

(お茶の水女子大学大学院)